
ロー&エース

ピロシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロー&エース

【Nコード】

N8598L

【作者名】

ピロシキ

【あらすじ】

これはポートガス・D・エースとトラファルガー・ローは実は幼少時に出会っていたのではないかという仮定の元に書かれた妄想B Lです。

しかし性的描写はなしで、仲良すぎ男子を目標に書いていきます。

興味があればご一読ください。

序章 旅立ち（前書き）

あらすじにあるように仲良すぎ男子を目標に書いていくBL作品です。

苦手な方はご遠慮ください。

序章 旅立ち

かつてこの世の全てを手に入れた伝説の海賊がいた。

その男の名はゴール・D・ロジャー。

彼はひと時の間時の海賊王となったが、そんな彼にも終わりのときが訪れる。

しかし、彼の肉体が滅びようとも彼の存在が滅びることはなかった。

彼が死ぬ間際に残した伝説の財宝「ひとつなぎの大秘宝」^{ワンピース}。

その遺産をめぐり、幾人もの海賊が覇権を賭けて争う大海賊時代が始まった。

そしてここにもまた、ワンピースを求める海賊がいた。

「いやあ、今日もまたいい天気だなあ。」

彼と言うにはまだ少年と言ったほうがいいだろう、年の頃は16、7といったころの男がボートのような小船に横になっている。左腕に彼の名前だろうか？

「ASC E」の文字の刺青がある。Sには×印がついている。

しかし果たして海賊と呼んでもいいのだろうか？

「さて・・・最初はなにをしようかな？やっぱり仲間集めか？」

海賊というのは普通何人かの集まりである。

だが彼は一人で小船に海賊旗をかかげていた。

まだ彼は駆け出しであり、つい3日前に故郷を離れたばかりのペーパーであった。

「財宝探しもいい、未知の世界も見てみたい。……でもやっぱり最初に必要なのは『仲間』だよなあ……。」「
と、彼はまだ見ぬ未来に想いを馳せる。

「でもまあ、まずは……。コイツをどうすつかだな。」「
そう言いながら彼はゆっくりと体を起こし立ち上がった。

彼の目の前には巨大な海王類がいた。
海王類とは性格は凶暴なため人間からは恐れられている生き物で、海の生物の中で最強に属する化け物だ。

並みの海賊船ならこいつらに出会っただけで全滅してしまう。
こいつらに出会ったら逃げの一手を打つのが普通だ。

ましてや、たった一人でこれに挑むなんてのは並では考えられない。
だから彼は並ではないのであろう。

その顔には恐怖は微塵も浮かんでなく、むしろひょうひょうとした様子でこともあろうに目の前の海王類に話しかけ始めたのである。

「いや、悪いな。ここら辺はお前の縄張りだったのか。気づかないで入ってしまったんだ、悪気はなかったんだ。許しちゃくれないかい?」

右手で頭を搔きながら左手を体の前で立て謝罪のポーズをとる。

瞬間、彼の体に・・・いや彼の小船全体を中心に影がさし、さらに一瞬の後に船が海王類の体当たりで粉々になってしまった。

海王類の攻撃の前にタダの木屑になってしまった小船。

その木屑の内比較的大きなものの上に、いつの間に回避したのだろうか、彼は立っていた。

「って、ああー！？てめえ謝ってんのになにしてやがる!？」

まるで緊張感なく彼はそう言い、怒りをあらわにする。

「クッソ、これ作るのにどれだけ時間かかったとおもってんだよ!？」

と、今度は少し泣きそうな顔になっている。

海王類はまさかこんなちっぽけな生物が自分の攻撃をかわせると思っていたのだったのだらう。

少し驚いた顔をして彼が憤っている間固まっていた。

だがそろそろ我を取り戻したみたいだ。

再び攻撃しようとして少年に向かって次の攻撃のために身構える。しかしまたもや攻撃を躊躇した。

少年の様子がおかしかったのだ。

恐怖におののくでもなく、かといって先ほどまでの愕然とした様子でもなかった。

「・・・へへっ、たまらねえな。」

少年は笑っていた。

虚勢ではなく本当に嬉しそうに・・・笑っていた。

「いやー、これでこそ冒険って感じだぜ。・・・そしてお前が俺の冒険の記念すべき最初の敵ってわけだ。」

海王類は普段見慣れない獲物のその態度にしばしどうすればいいか考える。

「お、どうした？今更ビビっちゃったか魚ヤロー？」

その様子を見て彼はかかって来い、と人差し指でチヨイチヨイ自分を指差し挑発する。

それを見て海王類の目が赤くなる。

それは彼ら海王類のキレたときの特徴だった。

彼らはその名通り海の生態系の王なのだ。

こんなちっばけな存在にコケにされたら怒らないはずも無い。

海王類は猛然と少年に突っ込んでいく。

少年は変わらず不敵な笑みを湛えたまま戦闘の構えをとる。

「来いよ、ドサンピン。俺が喰ってやる。」

この戦いが、後に大海賊『白ひげ海賊団』の2番隊の隊長を務め、海賊時代に大きな波紋を巻き起こすきっかけとなる「大戦争」の中心人物、ポートガス・D・エースのデビュー戦であった。

出会う（前書き）

今回心肺蘇生の描写があります。

一応調べた上での記述ですが、信用しすぎないようにお願いします。
命は大事です。

出会う

トラファルガー・ローは今日も海を見に来ていた。

彼は毎日海にやってきては浜に座ってはぼんやりと海を眺めていた。

何か意味があるわけではなかったがそれを日課にしていた。

海は毎日毎日、変わらない姿をローに見せていた。

だがその日はいつもと違っていた。

いつも通りに海に来ると普段なら無いものが転がっていた。

人間の体だった。

何事にも動じにくい性格をしている彼だが、人体が砂浜に流れ着いているのには流石に動揺した。

「おいおい、マジか？」

淡々とした口調でそう言いながら、しかし焦った表情で流れついている人間に駆け寄る。

ガタイのいい青年がうつ伏せに横たわっていた。

周囲を見渡してみるが近くの砂浜には誰もいない。

なにがあったかはわからないが流れ着いたのはこの青年だけらしかった。

抱きかかえるようにして仰向けにしながら呼びかける。

「おい、あんた！聞こえるか！？聞こえたら返事しな！」

肩を数度叩いて呼びかけてみるも反応がない。

ローは反応がないことを確かめるとすぐに青年の口元に耳を近づける。

かと思うと、今度は青年の胸に頭を乗せる。

呼吸と心音を確認しているのだがその行動は驚くほど素早かった。

「ちいつ、呼吸どころか心臓も止まってやがる！」

そうして心肺が共に停止しているのを確認したローは迷わなかった。

青年をそつと砂浜に降ろし躊躇なく心肺蘇生を行う。

少しも恥ずかしがることなく人工呼吸と心臓マッサージを繰り返す。

通常、心臓が停止してからの5分間が蘇生のリミットといわれる。それを超えると心臓が動き始めても先に脳の方が酸素が供給されずに壊死してしまい心筋が動いても意識が回復せずそのまま植物人間になってしまう、もしくは帰らない人になる。

ローはそのことをよく知っていたし、いま目の前にいる人間がいたいいつここに打ち上げられたのかを冷静に思考していた。

それでもローは蘇生行為を一心に続ける。

その行いが無に帰すると思いつながらも続ける。

それはきつと彼が毎日海を長めに来る理由と関係有るのだろう。

彼は「命」とか「世界」と呼ばれる・・・実際に形を伴うことの無

い「何か」を感じることが出来る人間だった。

そういう「尊さ」を知っていた。

言葉にならない「何か」に敬意を払う彼は少しだけ残っている可能性、それも天文学的數字の可能性でしかないが、を追いかけた。

するとそんな彼の思いを汲み取ってもらえたのか、はたまた青年の方の並々ならない強運の成せる業か、青年の心臓が動いた。

「・・・つぐ、、がつ・・・!!」

「！ よしいいぞ！帰って来い！」

同時に呼吸もし始める。

ローは青年の体を起こし水を吐く体勢をとらせてやる。

「おい、あんた！俺の声が聞こえるか!？」

体が水を吐いて、痙攣を起こしてもはつきり意識が戻るまで安心はできない。

油断することなくローは意識の確認を取ろうとする。

すると青年の目がうつすらと開かれた。

そしてローと目が合う。

その瞳からは彼の意識が感じ取れた

それを見てローは安心する。

「・・・へへっ、まさか・・・って感じだな。」

ホツとしたローの顔には珍しく安堵の表情が浮かんでいた。
年がら年中仏頂面をしているローのその表情は滅多に見れるものではない。

まあ、それも目の前の青年しか周りにはおらず、その青年も今はそんな余裕はないのだが。

そもそも表情の変化も初対面の人間には気づけないほどの極小の変化だったのだが。

「おい、大丈夫か？・・・どつか痛いところとかあったりするか？」

ローは青年にそう問う。

もう顔は普段の仏頂面に戻っていた。

「・・・し・・・れ・・・」

すると青年の唇がフルフルと震えながら動く。

「あん？なんだって？」

小さくつぶやくので聞き取ろうと耳を寄せる。

「・・・メシ・・・食わせてくれ・・・」

「・・・は？」

普段冷静で表情が崩れないローだが、この日は完全に違っていた。
耳を疑うような発言にポカンと口を開けるローなんてのはもう一生見れないかもしれない。

だが、まあローが普通なのだろう。

それは今の今まで生死の境目を漂っていた人間の発言ではない。

だが驚きはその程度ではすまなかった。

ローが支えていた青年の体が急に重くなった。

その突然の加重にローは慌ててバランスを取り青年の様子を伺う。

「……ぐー。」

爆睡していた。

つかイビキをかいていた。

「……大したタマだけ……あんだ。」

ローはもはや呆れるしかなかった。

ローにはあずかり知ることではなかったが流石ルフィの兄である、
といったところだろうか。

見事な爆睡であった。

しょうがねーな、とため息をつきながらローはエースを担ぎ上げも
と来た道を帰り始めた。

この日、珍しく彼は海を眺めなかった。

出会う(後書き)

多分8月23日に次話つp

復活

目が覚めた。

目を開くとそこには空もなければ海もなく、かといって真っ白な世界というわけでもなかった。

「おっと、真っ白じゃ天国だな・・・」

それはない。

・・・俺が・・・俺の血がソレを許すわけがない。
俺が天国にいけるはずもないのだ。

「かといって地獄でも・・・ないよなあ？」
と、周りを見回してみる。

そこは小さな部屋だった。

エースはベッドの上に寝かされていた。

そのベッドは部屋の中心に置いてあった。

その周りにはよくわからない機械がたくさん鎮座しており、それらからは何本ものケーブルが生えていた。

なんだかとても手作り感があふれた機械類だった。

ベッドの両脇の壁際に目をやると色とりどりの液体が入った試験管がならんだ棚や、カエルや鳥などの見たことある生物からおそらく脳、・・・あれはもしかして人間の足か？も浮いている大きさまざ

まな水槽があった。

そして正面の壁には扉のついていない出入り口がひとつ。天井には明り取りのための小さな窓がひとつ。

ただそれだけしかない質素な部屋だった。

「病院・・・じゃないか、病院にはあつてはならないモノが多すぎる気がするし。」

「なんだ、目・・・覚めたのか。」

怪しげな棚や水槽を見ていたエースは声がした方向、正面入り口のほうに視線を持っていく。

そこにはたいそう目つきの悪い少年が、料理の乗ったお盆を持って立っていた。

「よ、よお。」

と、戸惑いながらも声をかけてみる。

「・・・具合は？」

愛想なんて欠片も無い返答だった。

「あ？ああ、どこもなんともないみたいだ・・・。どこの誰だか知らないがありがたいぜ。」

俺はまだ、こんなところで死ぬわけにはいかないから。

「そう思うなら目の前の人間に礼の一つでも言ったらどうだ？」

「は？」

「……」

「お前が俺を助けたのか？」

「ああ。俺は医者だ。」

そう言いながら雑多な部屋の中に埋もれていた椅子を料理を持ったまま器用に引っぱりだしてエースの傍に腰掛けた。

それはちよつと驚く事実だった。

この目の前にいる少年、年のころは身長からして13、14という程度だろうか？

成長期の真つ最中ぐらいに見える少年をエースはこの家の主の子供だろうとふんでいたのだが、それは間違いだったようだ。

「お前さんが医者？」

「ああ。」

「へー、年は？」

「15。もう16になる。」

「……へー。」

「何故目をそらす？」

「え？いや、・・・その、・・・もうちょい若いかと、思ってた・・・」

「・・・何故だ？」

「いや、少しちいさ・・・」

「どつやら飯はいらないようだな。」

「悪い！すまん！許してくれえ！」

ちよつと、・・・いや、かなり本気で気を悪くした少年は料理を持つたまま立ちあがろうとする。

そんな彼の腕をガシッとつかんでエースは誠心誠意の謝罪をする。その瞳はなんの一点の曇りもなくこう告げていた。

その思いはちよつと目つきの悪い、小さな少年にも読み取れた。

『すまなかった。』・・・ではない。

『食わせてくれ！』・・・である。

そりゃ涎を垂らしながら料理を見つめ、トドメと言わんばかりに腹の虫に大合唱させていれば誰だって気づく。

「わ、わかったから離せよ、食っていいから。」

そう言いながら椅子に座りなおす少年。

「ほら、食べよ。」

そう差し出されたお盆にはラップされたお皿とどんぶが1つずつ。持ってみるとまだ温かい。きつとできたてなのだろう。

「ありがてーや！食わせてもらっぜー！」

エースはそう言い放ち目の前でパンツと合掌すると、添えられていた箸を使って掻きこむように食べ始めた。

いやもはや飲み込んでというほうが正しいか。

こういうところは故郷に置いてきた弟とにそっくりだったりもする。あつという間に全てたいらげてしまつとエースは少年に改めて礼を言った。

「うまかつた！正直まだ足りねーが飢餓は脱したよ、ありがとな。」

「そうかい、それは良かったな。」

と、一瞬の飲食（まさに飲み込むように食べた）を黙って見ていた少年は答える。

「いやー、悪かつたな。コレ、お前の昼飯かなんかだったんだろ？と、極限の空腹からは脱し先ほどの少々礼儀を失した行動を反省したのか片手を立てながら謝罪するエース。」

「いや、かまわねーよ。これはもともとアンタのだ。自分で頼んだの覚えてないのか？」

「え？俺、今日が覚めたばかりなんだけど？」

「そうか。いや、海岸で死にかけのアンタを拾ったんだが人工呼吸の後にアンタが言ったんだよメシ食わせろって。俺は助けた手前、アンタの願いを叶えてやった。それだけだ。」

「……………」

「ん？どうかしたのか？」

「……………あれ、お前さんが作ってくれたのか？」

「ああ。」

「わざわざ俺のために？」

「まあな。」

こともなげに答える少年。

エースはたった今食べ終え空になった皿を見る。

そういえばそれらにはもともとラップがしてあった。

いったい何故だ？エースが起きてから持ってきたのであればそんな手間はいらなかったはずだ。

答えは簡単。

少年はエースが起きてないと思っていたのだ。

では何故起きていないエースのところにはラップをした料理を持ってきてくれたのか？

それも簡単。

目が覚めたとき、自分が傍にいらなくてもすぐに食事できるようにだ。今にして思えば先ほどの料理も冷めていても比較的味が落ちにくい穀物系でまとめた料理だった。

見ず知らずの俺に、赤の他人の俺に、・・・こんな呪われた俺に、ここまでしてくれたというのか？

「お前・・・いい奴だな。」

そうポロリと、自然に口をついて出ていた。

しかし言われた側の狼狽はすごかった。

「なっ・・・！そんなんじゃないやねーよ！勘違いすんな！義務だよ義務！お前を助けたから最後までつてただけだよ！」

と、そんなツンデレなセリフを吐いてしまっし、よくよく見れば浅黒い肌をしているので目立たないが頬も若干赤くなっている。

少年のこんなシーン、多分彼の生涯でもそう何度もないだろう。

「いや・・・ありがてえ。本当に、いい奴だよお前。」

だがエースは少年のそんな様子にも気づかず、にそう繰り返す。

「ぐっ・・・調子狂うな本当。ならまあそれでいいよ。」

照れ隠しにそう答える少年。

「そ、そっぴやまだお互いに自己紹介もまだだったな。俺はロー。
トラファルガー・ローだ。」

「ん。じゃあローって呼ぶな。助けに来てくれてありがとう。俺は・・・
エースだ。ポートガス・エース。エースと呼んでくれ。」

少し奥歯にものが詰まったような言い方をするエースをローは少し
怪訝に思うが気にしないことにした。

一瞬記憶障害かと思っただがそうではないようでローはホッと胸をな
でおろす。

「んじゃあエースさん。アンタはちよいと死にかけていたんだ。こ
れだけ会話できれば問題ないとは思っただけで2日ぐらいいはここ
に居てもらっよ？これは医者としての意見だ。それにどうせアンタ
どっかに止まる金も持ってないだろ？」

「あ、ああ。それはこっちも助かるが・・・いいのか？俺みたいにな
どこの誰とも知れない奴を引っ張りこんで？」

「どこのは知らないがアンタはエースなんだろ？誰かは今知った。
それに何度も言ってるだろう？これは救った『命』に対する義務だ。
俺はアンタの面倒を見る義務がある。だからエースさんはなにも気
にしなくていい。」

「そうか・・・なにからなにまで世話になるな。ありがとう・・・
って待てよ?」

「どうした?」

「さっき人工呼吸って言ったよな?」

「ああ。」

「誰が誰に?」

「俺がエースさんに。」

「・・・あー・・・。。。」

それを聞くとエースはなんとも言えない表情で黙り込んでしまった。
なんというか・・・気まずい。

すると「おい。」と少々怒気をはらんだ声色でローが声をかけてき
た。

「エースさん、アンタが今何を感じているかなんとなくわかる。わ
かるが決して照れたり、恥ずかしがったりするな。」

「あ、いや、そういうわけじゃ・・・。」
と弁解しようとするがローの真剣な顔を見て声は尻すぼみになっ
ていく。

「いいか？あれはアンタの命を救うための行為だ。決して恥じるべきものではない。アレを恥じるとするのは『命』を冒瀆するに等しい。それだけはするな。」

その言葉には、彼がどれだけの敬意を『命』に対して持っているかわかる、そういう『重み』があった。

「・・・ああ、わかった。無礼な真似をして悪かったな。」

「いや、わかってくれたならいいよ。」

そう答えるローの表情は少し、穏やかだった。

「んじゃ、まだ足りないみたいだから俺はまたメシでも作ってきてやるよ。エースさんは寝てな。」

そういつてローは立ち上がり、エースが食した皿を持って出て行くとする。

そしてローが出入り口を出ようとしたとき、エースが彼を呼び止めた。

「待ってくれ。」

「ん？なんだい？」

首だけこちらに振り返りながらローは立ち止まる。

そんなローにエースは意を決してひとつの質問をする。

「どうして・・・どうして俺を助けたんだ!？」

ともすれば泣き出しそうな、答えを恐れているような、期待しているような、そんな表情でローに問いかける。

このとき彼はどんな答えを期待していたのだろうか？

その問いにローは至極あっさりと答える。

「あときは結構ギリギリでなにかを考える余裕なんてなかったんだが・・・そうだな、強いて言えば・・・なにもここで死ぬことはない。そう思っただけさ。」

「そうか・・・」

その答えを聞いてエースはどう思ったのだろうか？
忌み嫌われた血を持つ彼はいったい何を考えただろうか？

それは・・・彼にしかわからない。

「それだけか？」

「ああ、・・・それだけだ。」

「じゃあ俺は行くぜ？」

そう言い残しローは部屋から出て行った。

一人になったエースは生きながらえた命について、先ほどの会話について考える。

果たして俺は生きていていいのだろうか？

自己の存在理由がわからない。

自己の存在意義がわからない。

俺は『生きる』ことを許されているのか？

死の淵から救い上げてもらった『命』について悩む。

ポルトガス・エース。

正確にはポルトガス・D・エース。

史上に名を残す大海賊、ゴール・D・ロジャーの血を引く最後の生き残り。

このとき、まだ17歳だった。

復活（後書き）

前回の投稿からすぐく間が空いてしまいましたすみませんでした。
許してー……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8598/>

ロー&エース

2010年10月16日13時12分発行